

# 鮫皮考

——新井白石蘭語彙覺書——

岡村千曳

## 一序

新井白石が、徳川中期において、はやくも世界圏の認識に関して、時流をぬきんでていたことは、『西洋紀聞』・『采覧異言』などによって知られており、大槻玄沢は、白石をさして、蘭学研究の創始者とみなしている。しかしながら、白石が西洋の文化について、どれだけ深い認識をもっていたかということは、それらの材料だけでは、まだ十分に知ることではできなかった。

近年、宮崎道生氏の『新井白石の研究』が出版されるに至って、これらの点も新しい資料の紹介により、よほど明らかにになって来た。同書には、白石が編したと思われるオランダ語彙が収録されている。語数は、わずかに三、四百語に過ぎないと思われるが、私はそれを読んだ時、いろいろな観点からすくなからぬ興味をそそられた。

ただし、それらの蘭語はカタカナ書きであるので、これをローマ字綴りに復元したならば面白いだろうと思われる。しかし私はそう思ったばかりで、それを実行することは面倒だと考えて、そのままにしておいた。ところが、近

頃少しく必要があつてその復元を試みた。しかし、いよいよとりかかってみると、意外な困難のあることを知った。それは、

(1) 原本転写の際の誤読。

(2) 白石に不慣れた蘭語の聞き違い。

(3) 長崎在住の蘭人達が、実際に使用していた蘭語であることには相違ないと思われるが、Halma や Marin  
その他、普通のオランダ語辞典には採録されていない語があること。

などである。

(1)の例としては、「語彙」に「北のシキ ムスコビーヤガラス」とあるそれである。私には、「北のシキ」が、何の意味か解しかねて行きつまったのであるが、ムスコビーヤは、中世ラテン語の *Muscovia* すなわち今日のロシア (*Russia*) の意味、ガラスは *glas* すなわち硝子であると考えて、その方面から調べたところ、今日オランダでは、雲母を *moskovisch glas* ともいうことを知った。ロシアでは、昔、雲母を窓に利用したところから出た名称であるという。そこで私は、「北のシキ」は「香のシキ」の誤植、または誤写であることを知った。私の子供の頃、香道具のなかに、銀で縁どった雲母の薄片を見出し、あそんだことを覚えてゐる。それは香をたく時に用いる隔火で、普通「香の敷<sup>シキ</sup>」とよばれていた。それゆえ、「香のシキ *Muscovia glas*」が正しいと思う。

(2)の例。「火雞 ホルコルストロース」

これは「火雞 ホーゲルストロイス」の聞き違いかと思われる。vogel は鳥、struis は駝鳥の意である。蘭語の *Kasuaris* を中国では、火雞・食火鳥・厄馬 (*emou* の音訳) などと訳しており、わが国では、これを火食鳥(どくい)と

よんでいる。それゆえ、「火雞」の対訳は、「カスワリス」とするのが正しい。しかし、火食鳥と駝鳥とは同類であるため、徳川時代には、両者はしばしば混同された。なお『辞源』に、「〔火鳥〕火鳥古称駝鳥」と見えているので、中国でも両者は混同されていたと思われる。『道訳ハルマ』にも「Casuaris, z. m. Indische vogel. 駝鳥」と見えている。そこで私は、「火雞 vogel struis」と復元すべきであろうと考える。

(3)の例。「らせいた コロンラッシ」

これは『道訳ハルマ』に「Kroon ras 羅背板」とあり、また大槻玄沢の随筆『寄々次第』に「Croon rassén 羅背板」とあるのに該当する。ただし、「ras」または「rassen」は、毛織物の意味では、私の見たオランダ刊行のどの辞書にもものっていない。おそらくこれは、ポルトガル語の「taxa」を蘭語化し、貿易用語として「極上ラシヤ」といったような意味で、出島で用いていたものであろう。それで私は、「らせいた Kroon ras」と復元したらいかかかと思う。

右のような次第で、復元は、私にとって相当に困難な仕事であった。白石のこの語彙には、私にはまだ解決できない問題が若干ある。前書きはこれくらいにしておいて、次に、復元の際もつとも私をてこずらせた「魚皮 ラグヘル」について、やや詳細に述べてみたいと思う。

## 二 魚 皮 ラグヘル

白石の和蘭語彙覚書の復元は、予想外に困難なものであったが、そのなかでも、「魚皮 ラグヘル」は、私にい

ろいゝな疑問を提供した。

現代人は「魚皮」といえば、すぐ「ウツボ」の皮・「フグ」の皮・「サメ」の皮などを連想するであらう。しかし、徳川時代には、「魚皮」はもっぱら刀剣を裝飾する「サメ皮」の意に用いられたものである。それゆゑ、白石のいわゆる「魚皮」は、いうまでもなく「鮫皮」の意に解すべきである。

鮫はオランダ語で“haai”といい、その皮は“haievel”である。しかし「ラグヘル」を「ハーイフェル」の聞き誤り、または誤写であると断定することは、まったく不可能である。「ラグヘル」の「ヘル」は、オランダ語のフェル（皮 vel）に該当することは明らかである。それゆゑ、「ラグ」が問題である。そこで鮫を意味する「ラグ」に該当するオランダ語を捜してみたが、ついに見当たらなかった。その時、先年ある書物に、鮫皮は実は鮫の皮ではなくて、一種の赤鰐アカエイの皮であると書いてあったことをふと思ひ出した。いろいろ調べた結果、この鰐アカエイは、学名を“Trygon sephen Cuvier”とよぶことを知った。Trygon は赤鰐科の魚の意、Cuvier は、この鰐を始めて学界に紹介した有名な仏蘭西の博物学者 Georges Léopold Cuvier (1769—1832) のことであらう。この人には、“Histoire naturelle de poissons” という著書がある。なお、谷津直秀著『動物分類表』には、“Dasyatis Trygon アカエイ sting-ray : Stechroche, T. Sephen 背部の皮をサメガハ（沙皮）と称し刀剣のツカやサヤに用ふ」とある。（“Sephen”のことは後に述べる。）

そこで念のため、森島中良なからの『蛮語箋』に当たってみる。それには、「鮫 ロッヘ」・「鍋蓋魚アカカエビ ロック」と出ている。ところが、「ロッヘ」と「ロック」は、和蘭辞書に“rog”または“roch”（今日ではこの綴りを多く用いている）として出ている同語で、綴りは違つていても、発音も意味もまったく同一で、共に「鰐（エイ）」の意味である。徳川

時代の蘭学者は、蘭語をカナ書きする場合“g”と“ch”をカ行の音であらわしたものであるが、今日、蘭語を学んでいる人は、それに普通ハ行の音を当てているのである。厳密に言えば、そのいずれでもない特殊な音である。中良は、「鮫皮」はあくまでも「鮫の皮」であると思いこんでいたため、かような誤りに陥ったのである。

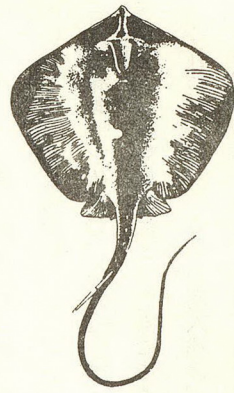
なお、『長崎ヘルマ（道訳ヘルマ）』を調べてみると、それには“roch”を「鱈」と訳し、“robbevel”に「鮫」という訳語を当てている。これは“rob”即ち「ラッコ」または「アザラシ」の皮という意味であるから、明らかに誤訳である。しかし、これによって長崎の出島では、はやくから「鮫皮」のことを「ロツヘフェル」とよんでいたものと推断される。

また、一八六二年版の Léon Pages の『日仏辞典』の「Same, サメ」の項を見ると、次のように定義している。  
Certain poisson comme la raie, ou le chien de mer. 〓 La peau de ce poisson, qui sert à couvrir les poignées d'épée ou les fourreaux.

〔訳〕 鰐の如き一種の魚、又は鮫（の一種）。〓 刀剣の櫛又は鞘を装貼する其の魚の皮。

「サメ」は一種の赤鰐または鮫を意味すると同時に、その皮の名称でもあるから、この定義はすこぶる正確なものといわなければならない。かつ、バジェスのこの辞典は、在日耶蘇会士が編纂した一六〇三年（慶長八年）長崎版の『日葡辞典』を仏訳し、一六三〇年マニラ版の『日西辞典』によって補訂したものであるが、上掲の定義は、一六〇三年の『日葡辞典』によったものであることが知られる。

これによりポルトガルの商人達は、(1) 徳川時代以前に、はやくよりサメ皮をわが国に輸入していたこと。及び、(2) その産地が彼らの勢力範囲内にあったので、それがいかなる魚の皮であるかということをも正確に知っていたことが



復元は、「魚皮 rogvæl」とすべきである。

### 三 鮫皮の歴史

推定されるのである。

前述の如く、日本にて鰐鮫<sup>つかいざめ</sup>、または真鮫<sup>まざめ</sup>とよばれ、最も重価をもって取引きされていたのは、実は南支那海・印度洋方面でとれる一種の赤鰐鮫の皮であることを、ポルトガル人やオランダ人は知っていたのである。それゆえ、オランダ人はこれを“rogvæl”すなわち「鰐鮫の皮」とよんでいたのである。白石の「ラグヘル」とよんだのは、すなわちこれである。そこで

さてこれで、復元の問題は解決を見たのであるが、私にはまだ未解決の問題が若干残っている。現代の中国辞典にも、国語辞典にも、「鮫」は、われわれがいま「サメ」とよぶ魚の意に解釈されている。また中国では、「鰐鮫」を海鰐魚・鰐・鰐・荷魚・鍋蓋魚などとよんでいるが、その皮が「鮫皮」となるという記事は見当たらない。李時珍の『本草綱目』には、海鰐魚の図がのせてあって、それは確かに赤鰐鮫の図であるが、その皮に関しては何ら言及するところがない。これは不思議なことである。いったい装剣の料としての「鮫皮」の歴史は、いずれの時代までさかのぼるのであろうか。また鮫は、古くから、いまい「サメ」を意味する文字であったのか、これらを説明する必要がある。

まず後漢の許慎の著といわれる『説文解字』第十一編を開いてみると、

鮫(鮫) 海魚也皮可飾刀

と出ている。この小篆の旁(りつ)の𩺰は、鮫の形象であると思われる。胴体の丸いところは「サメ」よりも鰐に近いけれども、頭は撞木鮫(くさめ)に似ていて、尾も鰐とは違っている。これをただちに鰐の形象とは断定しがたい。しかし、「皮は刀を飾るべし」とあるので、後漢のころには既に鮫皮で刀剣を装貼したことが知られる。

さらに『装劍奇賞』の著者稲葉通竜の編した『鮫皮精義』(天明五年(一七八五)刊)を見ると、いにしえより刀剣の櫛・鞘の飾りとする制があった証として、左の文を引用している。

〔後漢志〕 以<sub>二</sub>白<sub>一</sub>珠<sub>一</sub>鮫<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>鏢<sub>一</sub>口之飾<sub>ト</sub>。

〔異物志〕 鮫<sub>一</sub>魚出<sub>二</sub>合浦<sub>一</sub>、長<sub>二</sub>二三尺<sub>一</sub>、背<sub>一</sub>上有<sub>二</sub>甲珠<sub>一</sub>、文<sub>二</sub>堅<sub>一</sub>強<sub>二</sub>可<sub>二</sub>以<sub>二</sub>飾<sub>一</sub>刀<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>以<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>鏢<sub>ト</sub>。

通竜はまた、晋の左思の書いた有名な「呉都賦」に見える「鮫函<sub>ゴウカン</sub>」の字を、「サメザヤ」と和訓し、宋の歐陽修の「日本刀歌」に、「魚皮装貼<sub>セ</sub>香木鞘<sub>セ</sub>」といっているのも「サメザヤ」のことであろう、といっている。上海版の『辞源』には、「鮫函」甲也。鮫甲可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>鏢<sub>ト</sub>と注して、「鮫函」を鮫皮で作った鏢の意に解している。しかし「呉都賦」には、「扃<sub>ス</sub>帶鮫函<sub>ヲ</sub>」と出ており、扃帯は佩帯の意味であるから、通竜の和訓の方が正しいであろう。鞘を「劍函」といった例も知られている。

これら幾多の引例により、鮫皮は刀剣の装飾に古くより用いられていたことは、いよいよ明らかとなったが、これだけでは鮫の形状について知ることはできない。そこでさらに宋の羅願の著わした『爾雅翼』を調べてみると、鮫出<sub>ハ</sub>南海<sub>ニ</sub>、狀如<sub>レ</sub>鼈<sub>ニ</sub>、而無<sub>レ</sub>足、圓廣尺餘、尾長尺許、皮有<sub>二</sub>珠文<sub>一</sub>、而堅<sub>一</sub>勁<sub>ナリシ</sub>、可<sub>二</sub>以<sub>二</sub>飾<sub>一</sub>劍<sub>一</sub>、今摠謂<sub>二</sub>之<sub>一</sub>沙魚<sub>ト</sub>。と出ている。この記事は赤鰐の形状を簡単に、しかもすこぶる正確に説明している。鰐には菱形のものもあるが、赤

鰐はほとんど円形に近く、足のないスッポンのようである。ただしスッポンのような頭はなく、口は腹面にあり、眼はその円の上端に近く、下端に尾がある。中国で鰐を荷魚または鍋蓋魚というのも、その形状によって名づけたものと思われる。なお、私の見た『爾雅翼』には、文中の「可以飾劍」とあるのを、「可以飾物」としてある。これは「劍」の草体は、「物」に近いので誤読したのである。この記載により、赤鰐は、古くは「鰐」といわれていたのであるが、宋代には一般に「沙魚」とよぶようになったことが知られる。

次に、日本語「サメ」の語原に関し、この魚は形体に比し眼が細いので、「狭目」すなわち「サメ」とよぶという従来の説を否定して、中国語の「沙皮」の転じたものと見る方が穏当だと通竜は言っている。私は通竜のこの説を至極面白いと思う。

私には、沙皮は、アラビア語の“safan” (سافن) (Elias Anton Elias: Arabic-English & English-Arabic Dictionary, Cairo.) の音訳であると考えられるので、「サメ」は safan→沙皮→サメと転じたものであろう。なお沙魚と言ったのも同じアラビア語から出たのであろう。

“safan” は “sephen” の形で英語にもなっている。アラビア語をペルシア人が発音する場合、a を e と発音する傾向があるということだから、“sephen” はおそらくペルシアのアラビア語であろう。そこで私は、座右の英語辞書をとって “sephen” の項を見ると、

sephen (sefen), n. [<Arabic.] A sting-ray of the Indian Ocean and Red Sea, Trygon (or Dasybatis)  
Sephén, of commercial value for shagreen.

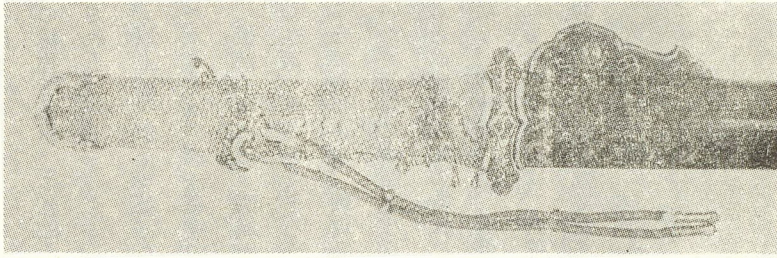
〔訳〕セフェン。「ハアラビア語」。「印度洋および紅海に棲息する一種の赤鰐。学名 Trygon (または Dasybatis) sephen として、シャググリーン用として貿易上価値あるもの。」

と出ている。シャグリーンというのは、「サメ皮」及び馬・驢・駱駝などの皮を型で圧搾し、表面を粒立たせたものの総称である。これによりアラビア人は、はやくよりセフェンをシャグリーンとして諸国に商販していたことが想定される。

以上述べきったところにより、鮫皮は、後漢のころ、すでに刀剣の装飾に用いられ、それは赤鯔科の魚の皮であったことは、ほぼ確実であると思う。

後漢の頃には、西域を通じて西南アジア諸国との交通も開け、仏教の伝来もあり、安息国や天竺からの朝貢もしばあったことであろう。ことにアラビア・ペルシア地方では、はやくから冶金術が発達し、立派な刀剣も作られたことであるから、朝貢品のうちには白鮫皮で飾られた刀剣もあって、それが中国人の好尚に叶い、広く用いられるにいったんではなからうか。白鮫皮は見た目に美しいばかりでなく、把握を堅くする実用的効果もあったのである。ことに唐より宋の時代にかけては、はやく航海術の発達したアラビアの商人達は、海路南支那沿岸に到着するようになり、宋時代には、広東・福建の地方に在住するアラビア人は、意外に多数であったと言われている。彼らが輸入したもののうちには、各種香料・薬品・砂糖・玻璃器などのほかに鮫皮もあったであろう。ただし朝貢云々は単に私の想像で、これを証拠だてる資料を持ち合わせているわけではない。

次に、わが国における鮫皮の歴史も随分古いことである。『東大寺献物帳』のなかの刀剣に、「鮫皮裏<sub>レ</sub>把」とあるのが見られるが、ありがたいことに、現にその実物が完全に残っている。去る昭和三十五年、東京国立博物館において、「正倉院宝物展」が開催された際、見事な白鮫皮で櫛をつつんである唐大刀（金銀鈿装唐大刀）が出陳され、衆目をひいたことはいまだに記憶に新たなところである。（次頁参照）これは確かに通竜が櫛鮫または真鮫とよんだ



“Trygon sephen Cuvier”の皮であることは、その粒所と色沢によって確認される。

この大刀は、おそらく日本で作られたものと思われるが、鮫皮は当時は中国より舶載されたものであろう。なお平安時代・鎌倉時代の刀剣で、鮫皮を用いたものが、旧家や社寺などの宝物中に原装のままで保存されていることと思われる。また束帯の時に帯びる魚袋の匣にも白鮫皮が張ってある。この制も遠く唐宋の昔にさかのぼるものであろう。

『鮫皮精鑑録』（宝暦九年〔一七五九〕浅尾遠視著）にも、『鮫皮精義』にも、欄鮫新皮図が出ている。（次頁参照）それを見ると、たしかに赤鱗の如き魚の周辺の鰭と尾とを断ち切ったその背皮である。長さは一尺七、八寸より二尺四、五寸のもの多く、稀には二尺八、九寸のものもあったという。背通りの正中筋を粒所と称し、そこに地粒より大形の顆粒が親粒（一の粒）を中心として、その上方にオサヘ粒、その下方、尾の方に向って二の粒、三の粒と次第に小さい粒が並んでいる。この粒所を中心に、欄に巻くだけの幅を残して両脇を切断し、さらに適当に上下を切りとった中央部を一の切と称し、これを漂白し磨き上げて刀欄に装貼したのである。

この欄鮫の粒所がよく整い、色沢の美麗なるものはすこぶる貴重視され、二、三百金にも値したといわれる。通竜の説によれば、欄鮫は占城産を最上品とし、サントメ・カンボチャ・大泥これにつぎ、シャム・交趾などの産はさらに品が下り、中国産のものは最下等の品であると言っている。

櫛鯨新皮圖

ツカサメ 海底ノ泥ニ染タル、ナレ其色黒レ

長サ「尺七八寸ヨリ二尺四五寸、或ハ八九寸ノモノ稀ニアリ」  
「尺許ノモノヲ手ノ甲沙皮ト稱ス、小魚ナリ」

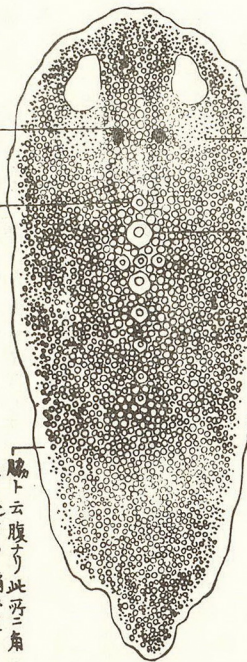
親粒ニヌリ下ヲ粒ヲトマリ

長穴

短穴

木入粒

脇ト云腹ナリ此角  
粒ヲ入レ下ノ櫛沙皮トス



刀櫛に用いられたサメ皮はもっぱら前述の、学名を *Trygon sephen Cuvier* という一種の赤鰐の皮に限られていたが、鞘に用いたサメ皮は多種類であった。通竜は「鞘沙皮類」と題して、花カイラゲ・豆カイラゲ・背カイラゲ・パツパ・チリメン・尼崎縮緬・アキザメ・海子・菊トヂ・蝶ザメ・白ベシ・柳ザメなど二十余種をあげて一々説明を加えている。そのなかには、*Trygon sephen* とは別種の、鰐の皮だと思われるものもあるが、蝶鯨・白鰐・黒鰐など、今日、食料に供し蒲

鉾の材料にも用いられる鯨類の皮もある。

以上述べたところにより、次のようにいうことができると思う。すなわち「鯨」は、古い時代には、刀櫛に用いる一種の赤鰐を意味する字であったが、近海でとれる「サメ」の皮もこれに類似するもので、装剣の料ともなり、また鑑にも用いられるところから、「鯨」の字の原意は失われ、後世にいたり、一般に「サメ」すなわち和蘭語の「haai」（英語 shark）の意味に用いられるようになったのであろう。

#### 四 サメの訓

最後に、私は鯨に「サメ」という訓をあてたのは、いつごろからか知りたいたって、わが国最古の辞書といわれる『新撰字鏡』を始め、『類聚名義集』・『倭名類聚抄』・『字鏡集』などを調べてみたが、結局、何らの結論に達することができなくて徒労に終わった。

これらの書はいずれも原本の伝存するものなく、みな転写本であるため、誤写や後世の補入が多く、判読にすこぶる困難を感じた。『新撰字鏡』(九〇年ごろまでに完成、十二巻本)は天治元年(一一二四)法隆寺の僧侶達が写したものが現存し、これが原本に最も近いものであるといわれている。幸いにして、その影印本が京都大学国文学研究室から出版されているので、それを見ると、

鯨 今作鯨  
古又有

と出ているだけで訓は見当たらない。家蔵本は、岡正武の蔵本を私の祖父が借りて謄写しておいたもので、清水浜臣と前田夏蔭の補注がある。これを見ると、

鯨 今作鯨  
古看反

とあって、やはり「サメ」という訓は見当たらない。ただし天治本注に、「古又有」とあるのは「肴」を二字に読み誤り、「反」を削除したもので、家蔵本の「古肴反」すなわち「カウ」という音を示したものと見る方が正しいと思う。それはとにかく、奈良朝のころまでは、鯨に「サメ」という訓がなかったのかも知れない。不思議なことには、

『新撰字鏡』には、鮠・鯉・鯛などに「佐女」の訓を施してある。しかしこれらは、いまいうところの「サメ」をさしているものとは解しがたいのである。

『類聚名義抄』(承平七年(九三七)完成)に、始めて、

「鮫<sup>サメ</sup>交<sup>サメ</sup> サメ」

と出ている。以後、『倭名類聚抄』『字鏡集』などには、みな鮫に「サメ」の訓がある。狩谷棧斎の『箋注倭名類聚抄』を見ると、棧斎は広く群書を渉猟して細注を施している。しかし鮫の項を見ると、鯉を意味する釈義と、いまいう「サメ」をさす釈義とが交錯して、はなはだ解しがたいものがある。そのなかに、「兼名苑云、一名鯈弥」と見えてゐる。中国の学者達も、「鯈弥」の解釈には悩んだらしい。鯈の音は、「紙」であるという説と、「帝」だとする説とがある。また、「弥」は、仏書では迷の音に当てているという説もあって、発音から問題になっている。鯈を「シ」と読めば、鯈弥は「シミ・シビ、またはシメ」となり、日本語のサメに近く、やはりアラビア語の *safan* の転と考えられる。

『字鏡集』には「鯈<sup>シメ</sup>人用反<sup>サメ</sup> 鮠」と出ている。これは「サメ」と「エヒ」を混同していたことを示すよい例である。

なお『新撰字鏡』には、「鯈衣比・鯈衣比・鯈其之反 編平魚 衣比」と出ている。鯈と鯈とは、あるいは蝦<sup>エビ</sup>の意かとも疑われるが、鯈には編(扁)平魚と注してあるので、確かに鯉を意味するものと知られる。また鯉は、その形が箕に似ているので箕魚と言ひ、箕と同音であるので、「其」と「魚」の合字を作つて、鯈すなわち鯉の意に用いたのであらう。

鮫皮は赤鯉の背皮をはぎとり、これを腐敗しない程度に乾燥させて輸出したものであるが、この魚は熱帯地方の沿

岸二、三十尋の砂泥底にすんでいるので、その皮には泥砂が密着していた。輸入地でこれを水に浸して柔らげ、皮うらの贅肉をそぎとり、表面の泥砂を除去して漂白し、さらにこれを磨き上げて美しい光沢を出したものが、白鯨皮として刀剣の櫛に装貼されるのである。それゆえ、中国人は *satan* を音訳するに当たり、砂泥底にすむ魚の意味をも含めて、沙魚・沙皮などとよんだのである。

また、鰐を鰐魚・鰐などともいうが、これも *satan* から出たものと思う。鰐は玉石を研磨すること、またはそれを使用する道具を意味するので、その意味をも含めたのであろう。実際、鯨皮は角細工や木工に用いる鱧として用いられたのである。アラビア語の *safan* が金剛砂 (*emery*) の意味に用いられるのもこれと同じ理由である。

(昭和三十五年九月老人の日成稿)